マーニャ、ミネアの姉妹に、コナンベリーでレイクナバのトルネコ、そしてミントスでサントハイム聖王国第一王女アリーナと、その従者ブライ・クリフトを仲間に加えた、勇者ディルこと〈竜の娘〉ディラジーナ。

次の目的を、マーニャとミネアの父の仇・バルザック打倒と定めた彼女達は、かつて姉妹がバルザックと「四本脚の獅子」に敗れた地・キングレオ城へと乗り込むこととした。
だが、魔法によって、城門は固く閉ざされている。かつての戦いの際、それをこじ開けたバルザックの兄弟子オーリンも、その戦いで斃(たお)れ、今はもういない……。

失意に沈むディルたち。しかし、そこに朗報がもたらされる。
亡き姉妹の父、偉大なる錬金術師エドガンが、魔法的に閉ざされた扉を解錠(アンロック)する魔道具(アイテム)〈魔法の鍵(ジャーベ・マギア)〉を密かに開発していたというのだ。
まさに、彼女達の未来と希望の扉を開く「鍵」を、亡き父は娘たちに遺してくれていたのである。そしてその鍵は、エドガン亡き今もなお、彼の秘密研究所であったコーミズ西の洞窟に安置されているという。
ディルたち一行は、その鍵を手に入れるべく、姉妹の故郷コーミズを行動拠点(ベースキャンプ)に、西の洞窟へと向かったのだが……。

困難な戦いの連続であった、勇者たちの長い旅路。
この物語は、その戦いのひとつ、その一瞬における彼女達の輝きを、余すところ無く記録したものである！

痛快戦闘ドラクエ４二次創作小説

「勇者ちゃんファイト！ ～突破せよ！ 死霊の包囲網～」

（ディレクターズ・カット・エディション）

（スクウェアエニックス「ドラゴンクエスト４・導かれし者たち」第五章より）

あさづけ兄貴

「ギラっ！」

彼女は、叫ぶと、炎を上げる己の左腕を、右頭上から斜めに振り下ろした！
腕から伸びた炎の帯が、眼前の敵……二体の動屍（ゾンビ）を舐める！
炎に包まれる、二体の頭部！

「グアオオオオッ！」
哀れな迷える死体たちは、己の脳を焼こうとする魔法の炎を消そうと、頭をかきむしり足掻くが……ほどなく、彼らは動きをやめ、倒れる。
死してなお行動を司る脳が燃え尽き、本来の彼ら――ただの死体に戻ったのだ。

それを一瞥すると、くるっと後ろに向き直り、駆け出すその少女！

大きな瞳に、みなぎる意志！
薄緑色（ミルクグリーン）のカーリーヘアーから弾け落ちる汗粒！

走った先には、もう一体の動屍（ゾンビ）！

「でやあっ！」
叫ぶと、右手に持っていた剣に左手を添え、袈裟懸けに一閃！
声もなく、動屍（ゾンビ）の体は斜めに両断された！

＊

「ふぅ……」
動きを止める少女。
上気する頬。
空のような濃い水色の、体に密着したインナーの上に、革の鎧（レザーアーマー）。
小柄で華奢な体――腕に、脚に、うっすらと、引き締まった筋肉。

そう。彼女こそ、この物語の主人公、勇者ディル――〈竜の娘（ディラジーナ）〉である。
ブランカからエンドールに着いた頃、ひとりぼっちで、ただ泣くことしか出来なかった彼女は今や……

見よ。信じ合える仲間の前に立ち、これほど堂々と戦うことが出来るまでに、成長を遂げていたのである！

＊

ディルの近くにいた動屍（ゾンビ）は、既に全てその活動を止めている。
しかし、ディルたちパーティを襲った敵は、彼らだけではなかった！

「吹っ飛びなっ！」
力強い女性の声に続き、淡い褐色の滑らかな指先から、光が迸（ほとばし）る！
「イオッ！」
ズガゥゥゥゥン！
大気中に圧縮された「燃える力を持つもの」が、呪文の詠唱に応じ、その力を解き放つ！
動屍（ゾンビ）が、骸骨（スケルトン）が、肉片や骨と化し、弾け飛んだ！

「どんなもんだい！」
自信たっぷりに笑う彼女は、勇者ディルの〈導かれし者〉のひとり。
褐色の膚（はだ）、薄紫色（ペールパープル）の長い髪に、胸当（ブレスト）てと下履（スコート）き、それに銀色の冠（ティアラ）だけという、開放的な服装。
深い湖水の色の、人懐っこそうなぱっちりとした瞳が輝く。

コーミズのマーニャ。
偉大なる錬金術師エドガンの遺児にして、元モンバーバラ一の踊り子（ダンサー）、そして天才的女炎術士（ファイアソーサレス）。

そしてもうひとり。
彼女と背中合わせに立つ、もうひとりの女性。
マーニャとよく似た褐色の膚、薄紫色（ペールパープル）の長い髪に銀色の冠（ティアラ）。
前髪を上げ、額を出した、理知的な面持ち。
身体を包むのは、一見橙色（オレンジ）の長布を体に巻きつけただけのように見える、エキゾチックな衣装。
眼前に迫る死体の群れに向け、彼女は優美な仕草で掌を伸ばし……叫ぶ！
「バギ！」
シュバアッ！
掌から風が駆ける！

風に巻かれた動屍（ゾンビ）の身体が、次々と、まるで剣で切られたように寸断されてゆく。

凄絶な風の刃を使いこなす彼女の名は、コーミズのミネア。
腕利きの占い師（フォーチュンテラー）にして、錬金術師エドガンの次女。すなわち、マーニャの妹である。

姉と同じ湖水の色の、だが姉より切れ長の瞳が、少し緊張を緩めた。
「こっちも片付いたわ。姉さん」

「ハッ！」
力の込もった鉄の剣の切っ先が、敵を両断する！
剣を振るったのは、若い男性であった。
厚手の布でできた緑色の僧服（カソック）に身を包み、サントハイム王家の紋章・円十字章（クライスクロイツ）が入った丈の高い帽子をかぶっている。
うなじのすぐ下で揃えた、艶の良い藍色の髪。
サントハイム聖教会正神官、クリフトである。

そして、もう一人……
「あと一体じゃ。行けるか」
クリフトの背後から尋ねる、老いた男の声。
小柄な老人だった。
頭の真ん中が禿げ上がり、両端に残った白髪が、斜め上に逆立っている。
口から顎に伸びる、白い髭（ひげ）。
薄緑の長衣（ローブ）の上に、緑色の布鎧（クロースアーマー）、この世界で言う「旅人の服（トラヴェラーズ・クロース）」を着込み、それをクリフトの帽子と同じ円十字章（クライスクロイツ）のバックルのついたベルトで留めている。
頭に赤い宝石の付いた簡素な杖で、身体を支える。

先代サントハイム王・アレクサンデル四世の世よりサントハイム王家に仕え、既に四十余年。
現在は、その子である現王ベルンハルトの知恵袋。
そして、かつては王国きっての凍術士（フリーザー）として、王国に攻め入る数万に及ぶ軍勢を、魔法による猛吹雪で足留めし、行動不能に陥らせた男。
〈凍嵐の魔人〉の二つ名を持つ、生ける伝説――
サントハイムのブライである。

「はい、なんとか……」

クリフトは答える。が、その内容とは裏腹に、彼は肩で息をしている。相当の疲労があるようだった。
無理もない。今回の戦闘で彼らを襲った亡者の群れは、全てクリフトが倒していたのだから。

通常の生物相手であれば恐るべき殺傷力を発揮する、ブライの凍結魔法(フリーズソーサリー)。だが、もともと体温のない、否、活動に温度を必要としない不死怪物(アンデッド)に対しては、低温は致死とはなり得ない。せいぜい凍結させて足止めが関の山だ。
そんなわけで、ブライは端(はな)から、この戦闘での敵に対する攻撃呪文の行使を諦めていた。必然的に、すさまじい負担が、クリフトの両肩にかかっていたことになる。
だが、その代わり……

「無理するでない」
ブライはぶっきらぼうに言うと、右手の杖頭の宝石をすっと敵に向け、一言。
「ルカニ」
それと同時に、かすかに乾いた亀裂音！
敵動屍(ゾンビ)の体表面に、目には見えない、無数の亀裂(クラック)が入ったのである。

敵の身体、あるいはその着けている鎧などの表面の分子結合を脆弱化し、物理攻撃に対する耐性を減弱せしめる呪文、それがこの「ルカニ」だ。
たとえ攻撃呪文が有効でない局面でも、このような支援呪文で現状を打開しうる……これが〈凍嵐の魔人〉の実力である。

「首筋じゃ。一気に行け」
「はい！」
クリフトは、呼吸を整えると、ブライの指示の通り……
「てやあっ！」
一刀で、脆くなった動屍(ゾンビ)の首を、横薙ぎに斬り落とした！

ちゃきっ！
「ふう……」
剣を鞘に戻すと、息をつき、額の汗をぬぐうクリフト。
ブライの方を向き直り、微笑む。
「ありがとうございます。助かりました」
「なあに」
片眉を上げ、ブライが答える。

「主(ぬし)にはまだまだ働いてもらわねばならぬからのう。これぐらいサービスせねば、罰が当たろうて」
「はいはい」
　相変わらずのブライの口の悪さに、思わず苦笑を浮かべるクリフトであった。

　周囲をきょろきょろと素早く見回すディル。
　自分だけでなく、マーニャとミネアが、クリフトとブライが、それぞれ眼前の敵を殲滅したことを、確認する。
「よし、終わりね……」
　馬車に戻ろうと、そう言いかけて――彼女の表情が凍った！
　馬車の至近の地面が、数カ所ぼこっと盛り上がり、そこから、手が……そう、人間の手が生えてきたのだ！
　手だけではない。手の下には当然、身体が続いており……
　土中から出てきたのは、都合三体の動屍(ゾンビ)！

「！」
　ディルが叫びながら駆け出す！
「トルネコさん！　こっちから敵が！　みんなも！」

「何ですとっ！？」
　馬車を挟んでディルと反対側に立つ、その男。
　まるまると太った体躯を、トレードマークの青と白の縦縞のシャツと、臙脂(えんじ)色のベストに包んでいる。
　同じ臙脂色の浅帽(カブツチオ)の根本からはみ出す、濃い紫色の、不揃いの短髪。そしてそれと同じ色の口髭。
　柔和そうな黒い瞳は、しかし今は険しい。
　右手には、杖頭に商人のトレードマーク・算盤(そろばん)を模した装飾をつけた、金属製の長杖(ロングスタッフ)。

　レイクナバのトルネコ。
　武器屋の日雇いから、一代でエンドール・ボンモール両王家の御用商人にまで上り詰めた男。
　長年の敵対国家、エンドールとボンモールの戦争を寸前で食い止めたのみならず、禁じられた愛に悩んでいた両国の継承者たち――ボンモール王子リシャール（リック）とエンドール王女モニカとの仲を取り持ち、奇跡のロイヤルウェディングを実現させた男。
　東エンドールからブランカへ、前代未聞の海底隧道(トンネル)を建設し、以後の人的交流と物流に多

大な影響を及ぼした男。
　文字通り「世界を変えた男」である。

　彼がディルの言葉に驚いたのは、敵が馬車に向かったからではない。
　否、正確には、それだけではない。
　彼が驚いたのは、ディルの方からも敵が向かってきたからだったのだ。
　そう、トルネコの双眸は既に、前方から迫り来る二体の骸骨（スケルトン）を捉えていたのである！

　ディルたちの唯一の移動手段であり、生活拠点である馬車。これを死守することは、彼女達にとって何よりも優先しなければならない重要命題であった。
　だが、今、その馬車が狙われている！
　しかも、馬車を挟んで対向からの挟撃！

「くっ……」
　迫り来る、前方の骸骨（スケルトン）、後方の動屍（ゾンビ）。
両者を見回し、歯噛みするトルネコ！

「！　馬車が！」
「いけない！」
　ディルの声に反応し、馬車の方へ駆け出すマーニャとミネア！
「間に合って！」
　ビシュッ！
　駆けながら、懐から一枚のカードを取り出し、敵に向かって投げるミネア！
　一方、指先に炎の弾（メラ）丸を出現させ、動屍（ゾンビ）を狙おうとするマーニャだが、こちらは……
「だめだ、撃てない……外したら馬車を巻き込む！」

「すみません、お先に！」
　駆け出すクリフトの背を、ゆっくり歩きながら眺めるブライ。
「そんなに慌てんでも良かろうに。この距離なら十分間に合うてくれるじゃろうて」
　目を細める。
「……姫様が、な」

「でやあああっ！」
　ボグゥッ！
　力強い叫び声と、何かが折れるような鈍い音！
　と同時に、トルネコの背後から迫る動屍（ゾンビ）のうち一体が、首を真後ろに折り曲げたまま、後

ろ向きに吹き飛んでいた！
　猛スピードで走り寄ってきた人物の跳び回し蹴りが、動屍（ゾンビ）の頭部に命中したのである！
　そして、その動屍（ゾンビ）の吹き飛ぶ先には、先ほどミネアが投げたカードが！

　ザクッ！　ヴァオオッ！
　動屍（ゾンビ）に突き刺さったカードが、その色と同じ銀色の炎を上げる！
　炎に包まれ、崩れ落ちる動屍（ゾンビ）！

　占い師であるミネアのトレードマーク、聖なる魔道具（アイテム）「銀のタロット」。
　その聖なる破邪の力に抗（あらが）える不死怪物（アンデッド）など、この世に存在するはずもない。
　そして……

　スタッ！
　残り二体の動屍（ゾンビ）と対峙するように着地する、その姿！

　軽くカールした、栗色の長い髪。
　頭には、紺青（ディープブルー）の、先の尖った、独特のデザインの帽子。
　橙色（オレンジ）がかった黄色の、ミニのワンピース。
　肩からは、帽子と同じの紺青（ディープブルー）のマント。
　黒のストッキングに、橙色（オレンジ）のブーツ。
　腰には、ブライやクリフトと同じ、円十字章（クライスクロイツ）のバックル。

　ディルと同い年、弱冠十七歳にして、世界の武術大会の最高峰・エンドール国王杯で優勝し、世界の頂点に立った少女。
　己の傷を厭わず、決してくじけずに困難に立ち向かう姿から、その二つ名を「不屈の王女殿下（ハイネス）」。
　サントハイム聖王国第一王女、アリーナである！

「アリーナ！」
「ナイスフォロー！」
　マーニャとミネアの賞賛に、アリーナは軽く微笑みを帰し……その表情のまま、肩越しに振り向き、叫ぶ。
「トルネコさん、こっちは任せて！」

「おお！　ありがたい！」

アリーナの力強い言葉に、トルネコも安堵した！
今や彼が集中すべきは、正面の二体の骸骨(スケルトン)のみ！
「ならば！」
右手に持った長杖(ロングスタッフ)を、地面にざっくと突き立て、命令文言(コマンドワード)を唱える！
「『正義の光よ、我が許(もと)へ』っ！」
それに反応し、杖の頭に付いた算盤(そろばん)の珠がせわしなく上下に動き……止まる。
そして次の瞬間、算盤(そろばん)から光が溢れた！
光は大きな玉となり、膨れあがり……トルネコを、馬車を、そして骸骨(スケルトン)を呑み込む！

トルネコ自身、そして馬車を引く白馬パトリシアには、この光は何ら害を及ぼさない。
が、骸骨(スケルトン)にとっては、この光は恐るべき致命の攻撃であった！
骨だけの身体が、光に触れた部分から、まるで削り取られたように消滅してゆく……

不死怪物(アンデッド)や、命があっても弱い怪物(モンスター)を、一瞬にして「消滅」させる能力。
これこそが、この長杖(ロングスタッフ)――商人にのみ所持が許された究極の武具「正義の算盤(そろばん)」の力であった。

眼前に立ちふさがる者が誰もいなくなったのを確かめると、トルネコはその場に、どっかと腰を下ろした。
「ふぃー……何度やってもくたびれるな、こいつは」
肩越しに、後方を見やる。
「よし、これであとは！」

「やあっ！」
ドオッ！
アリーナの右前蹴りが、動屍(ゾンビ)の腹部を直撃する！
動屍(ゾンビ)は後方に吹き飛び、もう一体の動屍(ゾンビ)にぶつかる！

今こそ好機(チャンス)！

動屍(ゾンビ)との距離を詰める！
体勢は左前半身！
左脚で、しっかりと地を踏みしめる！
右腕を引き、右拳を一度ゆるめ、再び握り直す！

ディルが、マーニャが、ミネアが、クリフトが！

走り寄る仲間たちの見ている前で、引いたアリーナの右拳が、金色の輝きを放つ！
「姫様！」
「出た！」
「アリーナ必殺の――」

「うおおおおおおっ！」
アリーナは、そのまま、輝く右拳を、折り重なった動屍（ゾンビ）の胸に叩き込んだ！

ドギュオオオオン！！
拳打とは思えない甲高い衝撃音！

アリーナの右拳の前に――
――二体の動屍（ゾンビ）の胸の中心部には、ぽっかりと大穴が穿（うが）たれていた。

さすがに、胸骨と背骨を持って行かれては、上体の支えようがない。
動屍（ゾンビ）はその場に倒れ伏し、動かなくなった。

アリーナ必殺の、闘気を共に打ち出す短距離拳打（ショートレンジブロー）。
状況を選ばず、その破壊力で砕けぬ物はない。
アリーナの右拳に宿りし「破壊の王」。
その強さを永遠に象徴し続ける「王者の拳」。
その名は〈王（ケーニッヒ）〉！

「これで……最後ね」
右腕を、ぶんっ、っと大きく振り、拳に付いた肉片を落とす。
「よーし、一件落着！」

＊

「それにしても……」

不死怪物（アンデッド）の軍勢を蹴散らし、馬車は一路、西へ向かう。
険しい山々を縫って延びる、渓谷の細道。
この道の先に、少し開けた盆地のような場所がある。

そこまで出れば、目的地の洞窟は目前だ。

一羽の鳥が、馬車の頭上で円を描く。
平和な光景だ。

ひとときの安らぎに満ちる馬車の中、口を開いたのはブライである。
「異常じゃな」
「だねえ」
革袋の水を一口飲みながら、マーニャが応える。
「これで、不死怪物（アンデッド）ばっかりの群れが、連続四回」
心底、いやそうな顔。

馬車の中には、六人。
ディル、アリーナ、クリフト、ブライ、トルネコ、マーニャ。
最後の〈導かれし者〉、バトランドの王宮戦士（パレスウォリアー）ライアンは、この時点ではまだパーティに合流していない。
そして、ミネアは今、馬車を引く白馬パトリシアの背に、御者として乗っている。

初代のパトリシアの専属御者――砂漠の宿屋の息子ホフマンが、ミントスでパーティを離脱した後、パトリシアの背には、もっぱらクリフトが乗っていた。
が、今は、先ほどの戦闘で体力をかなり消耗したクリフトを休ませるため、ミネアが御者を買って出ていたのである。

「不死怪物（アンデッド）って、こんなにいるもんなの？」
アリーナが、無邪気にクリフトに尋ねる。
「いえ、そんなはずは……」
うつむいて考え込むクリフト。
「滅びた村のように、場所そのものに多くの怨念が染みついた場所ならともかく、こんな人気（ひとけ）のない所に、不死怪物（アンデッド）がこれほどまとめて出現するとは……
普通、考えられません」
「あのぉ……」
ディルが、申し訳なさそうに口を挟む。
「ひとつ、気になることがあるんです」
「何ですか？」
クリフトに水を向けられ、やはり申し訳なさそうに、ディルが続ける。
「ここのところ立て続けに襲ってくる不死怪物（アンデッド）って……すごく、頭がいいと思うんです」

　空白。

「頭が……」
「……いい？」

　おおよそ不死怪物（アンデッド）に似つかわしくない言葉を聞き、パーティ全員の頭の中が、一瞬、真っ白になった。
　ディルの顔が、茹で上がったように赤くなる。
「あ、あの、ごめんなさいっ！ ただ、まっすぐ馬車を狙ってきたり、私たちの後ろからいきなり出てきたりとか――」

「それだ」

　クリフトのつぶやきは、意外なものであった。
「えっ？」
「それですよディル……だが、もしそうだとしたら……」
「クリフト？」
「何言ってんのよ、青年（クリフト）？」
　やや青ざめた表情で、クリフトは驚くべき言葉を口にした。
「……皆さん。私がこれから言うことは、単なる憶測でしかありません。ですが……
　もしこの憶測が当たっていたならば、我々の前に立ちはだかっているのは……かつてない難敵です」

「かつてない……」
「難敵？」
　かつてない厳しさをはらむ、クリフトの言葉。
「ディルの言葉でピンと来ました……。元来、不死怪物（アンデッド）には、皆さんもご存じの通り、思考能力がありません。本能、いや、破壊衝動と食欲のみに従って動く」
「でも、あいつらは違う……」
　ぼそっと、マーニャのつぶやき。
「確かにディルさんの言う通りだ。『頭がいい』というのも、言い得て妙かも知れんなあ」

言いながら、トルネコが口髭をいじる。

「で、クリフトよ。もったいぶらんで、主(ぬし)の憶測とやらを聞かせい」
「……わかりました」
ブライに急かされ、クリフトは結論を口にした。
「彼らの行動を操作(コントロール)している者がいる、と私は考えます。恐らくは、〈死霊使い(ネクロマンサー)〉と呼ばれる一族でしょう」

＊

ディルたちの馬車の、遙か西。
四体の動屍(ゾンビ)に支えられた輿(こし)の上で、彼は水晶玉を見ていた。
「突破しおったか……確かに強い。エビルプリースト様が気に掛けるのも無理からぬことか」
しわがれた声で、つぶやく。

初老の男性……のように見えた。
骨張った頬に、やけにぎらついた瞳。
頭には、派手な装飾の付いた、青い背の高い帽子をかぶり、黒い長衣(ローブ)をまとっている。

彼こそが、今回のディルたちの敵。
クリフトの言う〈死霊使い(ネクロマンサー)〉……その頭領、人呼んで〈大死霊使い(ネクロマスター)〉である！

＊

一週間前のことである。

「お呼びでございましょうか、エビルプリースト様」
地底深く、魔界の中心地にそびえる、魔族軍の若き将デスピサロの居城、デスキャッスル。
その一室に、〈大死霊使い(ネクロマスター)〉は呼ばれたのである。

「話は他でもない。殺して欲しい者がいる」
言ったのは、上質な僧服(カソック)に身を包んだ、大柄な老人だった。
底の見えぬ、焦茶色(ダークブラウン)の瞳。
顔に刻まれた深い皺が、凄みすら感じさせる。

魔界軍四大軍団のひとつ、魔法使いや邪神の僧侶、彼らの使役する不死怪物(アンデッド)らで構成され

る「呪霊軍団」軍団長。
　そして、将デスピサロがもっとも信頼する、いわばデスピサロの右腕。
〈邪神官〉エビルプリーストである。

「殺して欲しい者……でございますか」
「そうだ」
　言うと、エビルプリーストは、部屋の中心、何もない中空に向け、右掌を掲げる。
　すると、その掌の先に、淡い光の玉が出現し……やがてその表面に、人の顔が浮かび上がった。
　少女だった。
　薄緑色(ミルクグリーン)の、くるくるにカールした髪。
　真剣な面持ちには、まだ少しあどけなさが残っている。
「少女……ですな」
「〈緑の髪の少女(グリーンヘアード)〉と呼んでいる」
　光の玉に映る映像が、変わる。

　先ほどの少女が、怪物(モンスター)と戦っていた。
　左手から、怪物(モンスター)の顔面に向けて火の玉を放ち、ひるんだところを、右手の剣で倒す！
　今や〈竜の娘〉ディルのトレードマークとなっている、剣と魔法の複合攻撃。
　この「メラを相手の顔面に放ってからの斬撃」を、ディル自身は「竜火斬(ドラゴンファイア)」と呼んでいた。

「これは……！」
　驚いた様子の大死霊使(ネクロマスター)いに、エビルプリーストが言う。
「そう、剣術と呪文の同時行使……
　この娘、未熟ながら、デスピサロ様と同じ能力を持っている」
「何と……」

「それと、もうひとつ」
　光の玉の映像が、再び切り替わる。
　彼女は、船に乗っていた。
　大きな船。
　帆には、商人のシンボル・算盤(そろばん)に「T」を二つ重ねたトレードマークが大きく染め抜かれている。
　世界を股に掛ける「トルネコ商会(トルネコ・トレーディング)」のシンボルマークだ。
「この娘、背後(バック)にあのトルネコが付いておる」
「トルネコ……？」

その名には、大死霊使(ネクロマスター)いも聞き覚えがあった。
「エンドールの地下に隧道(トンネル)を掘った大商人……あのお尋ね者でございますか？」
「左様。そしてそれだけではない」
船の上が、大写しになる。
甲板の上で、ディルと談笑する仲間たち。
「この者どもは？」
「あの錬金術師の、その師の娘共、それにサントハイムの王女とそのお付き共だ……」

エビルプリーストの言う「あの錬金術師」――コーミズのバルザック。
いまや魔族の走狗である彼は、師エドガンを殺めて手に入れた禁断の古代技術〈進化の秘法(セクレト・デ・エボルシオン)〉で己自身の体を強化し、また、魔族の地上支配作戦の実行責任者として、幾多の謀略を、この地に巡らせてきた。

キングレオ王国の王族の懐柔、そして王国の実効支配を目的とした「〈暗黒の獅子(オペラシオン・リオン・ノワール)〉作戦」。
バルザックは、王子カルロスにこの〈秘法〉を使用。王子の魂を闇に堕とし、その身体を異形の「四本脚の獅子」へと変化せしめた。
彼の師、亡きエドガンの遺した二人の娘が復讐戦を挑むも、その「四本脚の獅子」に全く歯が立たず敗北、エンドールへの逃走を余儀なくされている。
――そう、バルザックを仇と憎むその二人の娘が、今、この少女と行動を共にしているのだ。

もうひとつ。
バルザックが「〈暗黒の獅子(オペラシオン・リオン・ノワール)〉作戦」と平行して推し進めたサントハイム聖王国占領作戦、名付けて「〈逆十字(オペラシオン・アンヴェルセ・クロワ)〉作戦」により、国王ベルンハルトはじめ、国家の中枢に携わる者の身柄が、ほぼ全て魔族軍の手に落ちてしまったのだ。
サントハイム城にはいまや人間はおらず、城は少しずつ、魔族の前線基地にその役割を変えつつある。

その王族の生き残り、王女アリーナとその従者たちもまた、この〈緑の髪の少女(グリーンヘアード)〉に付き従っているのである。

城。父親。兵士たち。
己を支えてくれたもののほとんどを失い、残ったブライとクリフトと共に世界をさまよい続ける……この一件を仕組んだのが彼ら魔族であると彼女が知ったなら、誰よりも強く、魔族を憎むはずだ。
エンドール武術大会、あの闘技場(コロシアム)で、観客席のエビルプリーストすら恐怖させた、彼女の

闘志と精神力……
　魔族にとっても、敵に回したくはない存在であった。

「ということは、この娘と共にいるのは、いずれも我らに敵対する者、ということでございますか」
「そうだ。あの少女の元に、我らを憎む者が次々と集まっている」
　低く響く、エビルプリーストの声。
「偶然にしては出来すぎているように思うのだ」
「それもまた……この娘の力であると？」
「かも知れぬ、ということだ」

（それに……）
　ここから先は、口に出さない。
　エビルプリーストの胸の奥深く、渦巻く懸念……それは、数ヶ月前、彼らデスピサロの軍勢が、確かに殺したはずの「勇者」のことであった。

　確かにあの時、ブランカ北の隠れ村で、彼らは「勇者」を殺したはずなのだ。

　彼らの切り札、いまだアッテムトの地下深く眠る〈地獄の帝王〉エスターク。その〈帝王〉をも倒す力を持つと言われる「勇者」は、もうこの世にはいないはずなのだ。
　だが、「勇者」と同じ緑色の髪と、剣と魔法を同時に操る力を持ち、魔族に敵対する者たちを「導く」がごとく惹き付ける、この少女の力は、まるで……

（いずれにせよ、この憂い、ここで断ってくれよう）
　その決意は口に出さず、エビルプリーストは簡潔に、その意図を大死霊使（ネクロマスター）いに伝えた。
「幸い、この娘はいまだ未熟。芽は大きく育つ前に摘む」
　エビルプリーストが右手を握ると、映像を映していた光の玉が、一瞬でかき消える。
　振り向いて、命じる。
「こ奴らは今、コーミズ西の洞窟を目指す最中（さなか）……。殺せ。大死霊使（ネクロマスター）いよ、この娘を、そして仲間を一人残らず殺せ。貴様の全能力をもってだ」
「心得ましてございます」

　そう言うと、口の中で何かぶつぶつと唱え、右の人差し指を天に向ける。
　次の瞬間、大死霊使（ネクロマスター）いの姿は、部屋から消えていた。
　呪文による瞬間移動。
　恐らくはまっすぐ、コーミズ西の洞窟に向かったに違いない。

彼がいなくなった後の空間を、エビルプリーストは見ていた。
ひとり、つぶやく。
「――これで、片が付くと良いのだが」

「まあ、焦ることはない……」
大死霊使(ネクロマスター)いの薄い唇の端が、歪む。
「ゆっくり待たせてもらうぞ、〈緑の髪の少女(グリーンヘアード)〉。我が下僕(しもべ)たちと共にな……ククク……」

ギンッ！
同時に、血の色のような赤い光を放つ瞳が、彼の輿の周りに、無数に出現した！
死霊の慟哭が、渓谷を満たす！
「オオオオオオオオオッ！」

果たして、ディルたちは、この強敵を撃破し、無事に〈魔法の鍵(ジャーベ・マギア)〉を手に入れることが出来るのであろうか？

＊

洞窟の目前。
馬車は今、渓谷が開けた、盆地のような場所にいる。
だが……

「だめですな。囲まれてます」
困り顔のトルネコ。
彼が、己の持つ特殊能力「鷹の目」で、周囲を俯瞰した、その結果がそれだ。

彼には見えたのだ。
おびただしい死霊の群れが、この盆地につながる全ての道――今しがた来た東の道、洞窟へと続く西の道、そして南と北の細い道――を埋め尽くしているのが！
「数も多い……いや、多いなんてもんじゃない。普通に戦ったんじゃ、到底勝てませんな」

まだ、盆地には、不死怪物(アンデッド)は入ってきていない。が、このままでは、それも時間の問題であろう。

盆地より西、洞窟の程近く。
相変わらず輿の上で、大死霊使(ネクロマスター)いは薄笑いを浮かべていた。
「さあどうする、〈緑の髪の少女(グリーンヘアード)〉？　このまま死ぬか……それとも、せいぜい足掻(あが)くかね？」

「ディル！どうする！」
マーニャが、焦りの表情で訊く。

仲間たち（特にブライ）の教育により、このところ、ディルにも「戦術思考」らしきものが備わってきた。
それと共に、ディルが「勇者」としてリーダーシップを発揮する場面も増えている。

馬車の窓から、周囲を見回すディル。
太い道が東西に、細い道が南北に。

トルネコの話だと、敵の数は尋常ではない。
だが、敵は恐らく、クリフトが言うところの〈死霊使い(ネクロマンサー)〉に操られている。とすれば……

「クリフトさん！」
真剣な声のディル。
「その……死霊使い(ネクロマンサー)、でしたっけ。この近くにいると思いますか？」
「……そうですね」
知識を総動員し、慎重に言葉を選ぶクリフト。
「教会の知識が確かならば、彼らは操るべき死霊たちから、そう離れた場所にはいられないはずです。
――ですから、私は、今回の敵が死霊使い(ネクロマンサー)だとしたならば、必ず、この群れの近くにいると思います」
「ありがとうございます」
ぺこり、と、頭を下げるディル。

「そうか、そいつを倒せば、あいつらは全員、ただの死体に戻るはず……」
「だとしたら、あとは、どこにいるか、ね」
パトリシアの背から降りたミネアも、馬車での話し合いに加わっていた。
「社長(トルネコ)、あんたの『鷹の目』で、その辺分かんないもんかね？」
マーニャの問いに、かぶりを振るトルネコ。

「ダメですな。あれはできるだけ広い範囲を一気に見るもんですから……ひとつの目標を探すには、縮尺が小さすぎて」
「その辺、調節とかできないの？」
「無茶言わんで下さいよ。意識飛ばすのだけでも大変なんですから、あれ」

　トルネコとマーニャの会話を聞きながら……
　ディルは、考えていた。

　トルネコの「鷹の目」は視点が高すぎる。かといって、地上からは分からない。
　必要なのは、その中間ぐらいの高さの視点……

「アリーナ！」
「は、はい？」
　ここで自分が呼ばれるとは全く思っていなかったアリーナの、声が裏返る。
「ちょっと手伝って！」
「あ、ちょ、ちょっと！」
　ディルは、馬車から駆け出ると、アリーナの手を取り、強引に馬車から引きずり出した！

　馬車の横。
　ディルとアリーナ、二人の少女が、背中合わせに立っている。
　身体の横で、腕をお互いに引っかけ合う。
　そのまま後ろに反れば、二人組みの柔軟体操（ストレッチ）……そんな姿勢だ。

「いい？　見える場所に何か変なものがないか……よく見ててね」
「いや、よく見ててね、って……」
　アリーナが、背中の後ろのディルに、肩越しにいぶかしげな視線を向ける。
「どうやって、ここから敵の方を見渡すわけ？」
「飛ぶわ」
「へ？」
　ディルの一見返事にならない返事に、アリーナが素っ頓狂な声を上げたのと、ディルが天に向けて人差し指を掲げたのは、同時だった！
「ルーラ！」
　ディルたちの遙か頭上、中空にぽっかりと、黒い穴が開く！
　今自分たちがいる場所と、瞬間移動呪文（ルーラ）の目的地とを結ぶ「次元の裂け目（ワームホール）」だ！

　ディルとアリーナが飛ぶ！

吸い込まれる！
「うわわわわわわ……」
「よく見ててね、アリーナ！」

「ディル！ アリーナ！」
「な、なんだっ？」
他の仲間たちも、思わず馬車から駆け出す！

「む？」
死霊たちに周囲を護られた、輿の中。
敵前線指揮官・大死霊使（ネクロマスター）いもまた、上空に現れた次元の裂け目（ワームホール）と、そこに人間が何人か吸い込まれてゆく光景を見ていた。
「瞬間移動呪文（ルーラ）……我らに恐れをなして、逃げを打つか……」

だが。
一瞬間を置いて、その「次元の裂け目（ワームホール）」のすぐ横に、もう一つ、黒い穴が空く。
そこから、何かが落ちてくる！

「……わわわわわーっ！？」

そう、落ちてきたのは、たった今瞬間移動呪文（ルーラ）で飛んだ、ディルとアリーナだ。

大死霊使（ネクロマスター）いも、首をひねる。
「……何をやっているのだ、あいつらは」

スタッ！
着地する二人。

ディルは、今いる全く同じ場所に、ルーラでジャンプしたのである。
その際、次元の裂け目（ワームホール）に吸い込まれる前の、その一瞬――自分たちが高空にいるその一瞬に、敵陣をつぶさに見る！
それが、ディルがとっさに思いついた策だった。
とはいえ、ディル一人では、背後は見渡せない。アリーナを（強引に）連れて飛んだのは、彼女の背後をカバーするためだったのだ。

「はあ、はあ、はあ……」
　両手を膝に当てて上体を支え、肩で息をするアリーナ。
　顔が真っ青だ。
「お疲れ様」
　天使のようなディルの微笑みに、猛然と抗議するアリーナ！
「はあ、はあ……ちょっと、いきなり何するのよ！　死ぬかと思ったじゃない！」
「で、何か見えた？」
相変わらず、　憎らしいぐらいの、天使の笑み。
「ぐっ……」
（この子……侮れん……）
　心の中で冷や汗をかきつつ、アリーナはわざと不機嫌そうな表情で、言った。
「洞窟の真ん前、敵がうじゃ〜っといる真ん中に、四角くて黒い、大きいものがあったわ」

「四角くて……」
「黒くて……」
「大きい？」
　仲間たちが首を傾げる中、アリーナが続けた。
「輿（こし）ね。クリフトの言ってたネクロなんちゃらは、きっとその中にいるわ」

　予期せぬジャンプの最中に、さすがの動体視力。そして、多数の軍勢に守られた、四角い構造物……それを見て即座に「輿」を連想できるのは、さすがに王族の思考である。
　ディルの人選に、間違いはなかったのだ。

「あちゃー」
　ぺしっ、と、マーニャが自分の額を叩く。
「よりによって、一番奥かい」
「卑怯者の発想だわ」
　人間心理に詳しい占い師のミネアの、手厳しい批評。
「自分は汗をかかない。常に誰かをあてにし、誰かに自分を守らせる。それを一番安全なところでただ見守る……他人の上にあぐらをかいてきた人間の典型ね」
「へぇ……さすが専門家」
「しかし、クリフトさんの言ったとおりですな。死霊使（ネクロマンサー）いは確かにいる」
　半ば感心するトルネコ。
「ええ……これで、我々の取るべき行動ははっきりしました。あそこにいる死霊使（ネクロマンサー）いを倒せば、軍勢は全て活動を停止する。ただ……」

「ただ？」
「どうやって倒すか……です」

はあっ……
パーティ全員が、ため息をついた。

四方を見回すマーニャ。
東西南北、盆地に通じる道が、すべて、薄ぼんやりと、黒く染まっている。
恐らくは、あれが全て不死怪物（アンデッド）！

「この馬車を守りながら、その親玉さんの所にたどり着いて、倒す……」
もう一度、ため息。
「無理じゃない？」
「そこを何とかするのが――」
と、強がるアリーナだったが……
「――何とかなりそう？」
水を向けられ、考え込むディル。
そして数瞬の後、その口が紡いだのは、驚くべき言葉！
「少数精鋭で正面から敵陣に突入します。他のみんなは馬車を死守してください！ 」

「真っ正面から突っ込もう、っての？」
呆れるマーニャ。
「いくらなんでもそりゃ無茶でしょ……だいたい誰が行くの」
「いや、私が……」
「いや、いくらあんたでも無茶だって」
「それが、そうでもないんです」

「え？」
驚いて見上げるディルの瞳には、しかし、自信の光が輝いていた。
決して自惚れ屋ではないディルの、この自信は？

「マーニャさんは……あと、ミネアさんも、知ってるはずですよね」
ディルは、静かに、胸の高さに右拳をまっすぐ突き出した。
そして叫ぶ！
「ニフラム！」

ガカァッ！
ディルの拳から溢れる光！
「うわっ！」
「まぶしいっ！？」
圧倒的な光量に、仲間たちが思わず目を閉じる！

「あたたた……そうか、あんたのそれ」
「私たちと会ったばかりの頃、よく使ってた呪文よね」
納得するマーニャとミネア。
そう、確かにこれは、まだ剣も魔法も、今ほどは達者でなかったディルが、最後の切り札としてよく使っていた呪文であった。

「な、何それっ？」
「これは……！」
「ほう、ディル殿はこんな力までお持ちか」
一方、アリーナたちサントハイム勢は、ディルのニフラムを見るのは初めてである。
そして……

「いやー！　こいつは驚いた」
目を見開いているのは、トルネコである。
「その光、『正義の算盤（そろばん）』にそっくりだ……！」
「そうなんです」
少しはにかんだ様子で、笑うディル。
「さっき、トルネコさんの『正義の算盤（そろばん）』の光を見たとき、思い出したんです。
ずっと使ってなかったから、忘れてて……」
不死怪物（アンデッド）や、生きていても弱い怪物（モンスター）を「消滅」させる光――この効果は、まさに「正義の算盤（そろばん）」の光そのものであった。
「いやはや、ディルさんはつくづく凄いですなあ」
「へへ」
照れ笑いするディル。

「でもディル、一人で大丈夫なの？」
少し心配そうなアリーナ。
「何かで呪文が途切れたら、それっきりよ」

「あら、誰も『一人で行く』とは言ってないわよ。『少数精鋭』とは言ったけど」

しれっと言うディル。

「へ？」
ものすごく嫌な予感が、アリーナの胸を駆け抜けた。
「……もしかして、また私を連れて行こう、なんて、そんなことは……まさか、ね」

「アリーナ……」
ディルが、ジト目のアリーナの両手をぎゅっと握り、うるんだ瞳で言う。
「お友達だよね☆」

「はぁ……」
がくん。
アリーナの頭が垂れ落ちる。そして再びの猛抗議。
「貴方ねぇ……人使い荒すぎ！」
「あら、それだけ信用してるってことよ」
それを軽くいなし、笑顔で言うディル。
その微笑みは、やはり、天使のそれだった。

その光景を見ながら、本人に聞こえないように、マーニャとミネアが言った。
「ディル……強くなったねえ。お姉さんは嬉しいよ」
「でも、本当にこれで良かったのかしら」

（悪魔は、天使の顔をしてやってくるのよね）
そんなことをアリーナが考えていると……
「それに……」
不意に、ディルが真剣な表情になった。
「貴方にしか頼めないのよ。ちょっときついから、今回は」
「ディル……」

アリーナをまっすぐ見つめる、曇りのない青緑（ターコイズブルー）の瞳。
それは、本物の天使の瞳であるように、アリーナには思われた。

ちょっと憎らしいほど、強くなったディル。
だが、彼女の大きな瞳から覗くその本性は、やはり、素直で正直な、純粋な天使のそれであったのだ。

ディルがそういうのだから、今回は本当に、自分(アリーナ)にしか頼めないのだろう。
思わず、苦笑する。
「……しょうがないなあ。一肌脱ぎますか。ひとつ貸しね」
「ありがと！」
明るい笑顔のディルに、苦笑したまま、アリーナが訊く。
「……で、私の役目は？」

＊

盆地の中央に、馬車。
今来た東の太い道の出口に、マーニャとミネア。
北の細道の出口に、ブライ。
南の細道の出口に、クリフト。
そして、西の道……洞窟へ続く、そして大死霊使(ネクロマスター)いの待つ道の入り口に、ディル、アリーナ、トルネコ。

「じゃあ、行ってくるわね」
「お願いします、トルネコさん」
アリーナとディルが、背後のトルネコを見やる。
「くれぐれも、気をつけてくださいね」
「はい！」
「よし、それじゃあ、始めますよ！」
言うと、トルネコが、右手に持った「正義の算盤(そろばん)」を、地面に突き立てる。
そして朗々と響く命令文言(コマンドワード)！
「『正義の光よ、我が許(もと)へ』っ！」

ビカァァッ！
商人最強の必殺武器(リーサルウェポン)が、再び発動した！

それが合図だった！
「おおおっ！」
ディルとアリーナが、不死怪物(アンデッド)の群れに向け、一直線に走り出した！

＊

「あの光……始まったわね」

「お早いお帰りを……と」
　東の道、ミネアとマーニャ。
　おびただしい不死怪物（アンデッド）が、すぐ近くまで迫りつつあった。
「さて、あたしたちも頑張るか！」

「ほう、おるわおるわ」
　北の道、ブライ。
　不死怪物（アンデッド）の大群を、見据える。
「どれ、ちょいと遊んでやるかのう」

「スカラ！」
　南の道。
　自分の胸に手を当て、呪文を唱えるクリフト。その全身が、防護魔法（ディフェンス・スペル）の淡い輝きに包まれる。
　鞘から剣を抜き、構える！
「神よ……ご加護を！」

＊

「ニフラム！」
　カッ！
　ディルの左手から出た光に巻き込まれた骸骨（スケルトン）が、跡形も残さず、消滅する！

「ははは、こりゃ楽だわ」
　お気楽なアリーナ。
　ディルと共に、その光の中を走るだけで、敵はこちらに指一本触れられないのだ。
「きついのは最後だから、それまでは体力を温存しておいてね……ニフラムっ！」
　再びの光！
「はいはい」
　阻む者を次々と消滅させ、ディルとアリーナは、戦いの道をひた走る！

「ぬっ！」
　大死霊使い（ネクロマスター）の水晶玉が、時折輝きを増しながら、こちらへ一直線に向かう光の玉を捉えた！

「この光！　我が下僕共が消えていく……〈緑の髪の少女（グリーンヘアード）〉の力なのか！」
　額に、冷や汗が一筋！
「おのれ〈緑の髪の少女（グリーンヘアード）〉……返り討ちにしてくれるわ！」

　しかし。

　このとき、彼は大きな過ちを犯していた。
　これがディルの発生させた光である、と結論づけたときに、彼は思考を停止させてしまったのだ。

　いや、もちろん、その結論自体は、当たっている。
　だがそれ故に、いや、その力に驚き恐れた故に、彼は見落としていたのだ。
　そう、そのまばゆい光の中に、もう一人、恐るべき力を持つ格闘家が、人知れず潜んでいたことを！

＊

「あれ、行くよ」
「わかったわ」
　阿吽（あうん）の呼吸で、うなずき合う姉妹！

「はあああっ……」
　姉の両手の間に形成される、メラよりも遙かに大きな炎の玉！
「風よ……！」
　妹を取り巻き荒れ狂う、バギよりもさらに強い風！

　慎重に、タイミングを計る二人！

「メラミ！」
　叫びと共に、マーニャの手から、斜め上に、火球が放たれた！
　メラの上位呪文「メラミ」。
　赤ん坊の頭ほどの火球を放ち、敵を焼き尽くす。その威力は、メラミを数倍してなお余りある。

　敵の頭上に達しつつある火球。
　このタイミングで、今度はミネアが叫ぶ！

「バギマ！」
　伸ばした手から、嵐が空へ延びる！
　バギの上位呪文「バギマ」。
　メラミと同じく、その破壊力は、バギの数倍を数える。

　そして、バギマの風が、メラミの炎を細かく寸断し、さらに敵陣の奥深くへ吹き進む！

「食らいな化け物ども！　これがあたし達の……」
　二人、声を合わせる！

「『火の雨（フェーゴ・ジュピア）』っ！！」

　声と同時に、切り刻まれた火球が、一気に弾けた！　小さな炎の塊が、その名の通り雨となり、敵の頭上から降り注ぐ！
　グオオオオオッ！
　死霊たちの苦悶の慟哭が、渓谷に響いた！

　メラミの火球をバギマで細かく分割し、広い範囲に降らせる……
　生まれたときから二十年以上、共に過ごしてきた姉妹だからこそ出来る、炎と風の華麗なる競演（コラボレイト）。
　通常の攻撃呪文の常識を超える、広範囲面制圧用協力呪文（コンビネーションスペル）。
　それが、この『火の雨（フェーゴ・ジュピア）』なのだ！

「ヒャダルコ！」
　杖の頭から吹き出した凍気が、容赦なく動屍（ゾンビ）たちを襲う！
　ピキィン！
　みるみるうちに、不死の屍体たちの身体が、氷で包まれてゆく。
「ほれ、もう一丁！」
　今度は、その脇に立っている動屍（ゾンビ）に冷凍呪文（ヒャダルコ）！

　こうして、みるみるうちに、凍った動屍（ゾンビ）で出来た壁が、ブライの前に形成されていった！

　不死怪物（アンデッド）は、襲ってこない。
　凍り付いた仲間が壁となって、行く手を阻まれているのだ。

「主(ぬし)らの仲間で出来た氷の壁じゃ。壊してくるなら今度は主らが壁になるぞい」

「ハッ！」
　骸骨(スケルトン)を一刀両断にする、クリフトの剣！
　だが、いかんせん、敵の数が多い！
「一体一体潰していては、きりがないか……ならば！」
　クリフトは、ぐっと、剣の柄を握りしめた。
　刃先を上に、顔の前に立てる。
　左腕を剣の前で横に。
　十字架の形！
「『不浄なる者、裁きを受けよ』！」
　その祈りに呼応し、剣が白く輝く――この輝きは、正義の算盤(そろばん)やディルの破邪呪文(ニフラム)と同じ光！
　そして、剣で横薙ぎに斬りつけながら、叫ぶ！
「ゾンビ斬(ゾンビースレイヤー)りっ！」
　バシュウッ！
　光が敵の間を駆け、何体もの骸骨(スケルトン)に、動屍(ゾンビ)に、聖なる十字の印を刻み込む！
　そして次の瞬間、刻み込まれた十字の印から、敵の身体が崩壊し始めた！

　闇を浄化する、神の威光！
　教会に伝わる神官の剣法。その秘術が炸裂したのである！

＊

「見えた！」
　ディルが叫ぶ。
　確かに、不死怪物(アンデッド)たちの隙間から、黒い四角錐のような構造物が、垣間見える。
「あれね？」
「間違いないわ」
　ディルの確認を力強く肯定するアリーナ。そう、確かに、先ほどこの輿を上空から直接見たのはアリーナであった。
「あれが見えたってことは、もうすぐ着くわね……そろそろこの辺かな」
「そうね」
　二人の走るスピードが、緩くなる。

「じゃ、アリーナ……またあとで」
「ん。またあとで」
　一瞬のアイコンタクトの後、なんと、アリーナが歩みを止めた！
「ニフラム！」
　その場に棒立ちになるアリーナを置き去りに、ディルは眼前の敵を消し去り、先へ進む！

「……確かに、こんなことやれって言われて、実際にやっちゃうのって……私ぐらいなんだろうなあ」
　独り言をぶつぶつ言うアリーナの元に、忍び寄る亡者の群れ！
「だいたい無茶よね……『敵に囲まれたまま三十秒我慢して、その後改めて囲みを突破して目標を攻撃！』なんてさ」

＊

　無論、敵もまた、ディルたちの接近を知覚していた。
「来たか！」
　大死霊使(ネクロマスター)いは、傍らに置いた長杖(ロングスタッフ)を手に取ると、輿の上から飛び降りた！

＊

「おー、頑張っとるのう」
　地面に腰を下ろしたブライ。
　堆(うずたか)く積もった、凍り付いた屍体の山。
　壁を乗り越える敵を凍らせるうちに、不死怪物(アンデッド)の身体そのもので出来たその壁は、より高く、厚くなっていた。
　だが今、ブライの目に見えているのは、その壁の頂上からなおも顔を出し、壁を乗り越えようとする動屍(ゾンビ)であった。
　それを「頑張っとる」と評する余裕が、彼にはあったのである。

「じゃが、残念じゃのう」
　動屍(ゾンビ)に向け、人差し指を伸ばす。そして唱える。
「ヒャド」
　指先に集まった凍気が矢となり、一直線に動屍(ゾンビ)に向かって飛んでゆく。
　ピシッ！
　それ自体たいした衝撃ではないヒャドの直撃だが、滑りやすい氷の上にいる敵のバランスを崩すには十分であった。

動屍(ゾンビ)は簡単に手を滑らせ、後ろに倒れ……見えなくなる。
もちろん、氷の上から落ちたのだ。
「もう一度、登り直しじゃな。ほっほっほ」
意地悪な口調で言うブライ。最初に言った「ちょいと遊んでやる」というのは、あながち嘘ではなかったのかも知れない。

「ふぅ……ふぅ……」
クリフトの呼吸が、乱れている。
いかに「ゾンビ斬り(ゾンビースレイヤー)」で複数の敵を一気に倒すことが出来ると言っても。
そして、いかに防御魔法(スカラ)で守りを固めていると言っても。
今ブライがやったような姑息な手を使わない限り、一人でこの数を相手にするのは、無謀もいいところである。
ただし、今回は、彼が敵を掃討する必要はない。ディルとアリーナが大死霊使(ネクロマスター)いを倒すまで馬車を守り抜けられれば、それでいい。
クリフトも、そう割り切っていた。

とにかく、粘り強く耐える。それに尽きる。

「マヌーサ！」
敵の一瞬の隙を突き、幻覚呪文を唱えるクリフト！
刹那、敵の周りに、幾体ものクリフトの幻が並び立つ！
そちらに攻撃の矛先を変える亡者たち！
「そう長くは保(も)たないな……」
ゆっくり何度か深呼吸し、息を整えると、再び必殺のゾンビ斬り(ゾンビースレイヤー)を放つ！
……クリフトの戦いは、当分終わりそうにない。

「燃えてるわねー」
「ちょっとやり過ぎって気もするけど」

渓谷全体が、燃えていた。
マーニャとミネアが何度も何度も重ね掛けした『火の雨(フェーゴ・ジュビア)』により、盆地東の道はいまや、見渡す限り炎に包まれていた！
もうもうと黒煙を上げ、燃え上がる屍体の大群！
「でもこれで、後続はもう来ないね」

「あとは……」
　燃えさかる炎の手前には、まだ数十体の不死怪物(アンデッド)が残されていた。
「この距離じゃ、『火の雨(フェーゴ・ジュビア)』は撃てないわよ」
「ま、地道にやるしかないっしょ」
　マーニャの掌の前に、燃えさかる炎！
「そうね」
　ミネアの細い腕の周りを、風が取り巻く！
「ギラっ！」
「バギ！」
　迷える亡者がまた、為す術無く焼かれ、刻まれてゆく……。

　ディルとアリーナが駆けていった、西の道の入口。
「『正義の光よ、我が許(もと)へ』！」
　カァッ！
　不死怪物(アンデッド)たちの魂を浄化する、正義の算盤(そろばん)の光！
　だが……
「はぁ、はぁ……」
　強力無比な算盤(そろばん)の攻撃は、同時に使用者の精神力を消耗させる諸刃の剣である。トルネコの精神力も、限界に近づきつつあったのだ。
「こいつはきついぞ……。ディルさんたちが帰ってくるまで、保つかねえ……」
　死者たちの行軍は、いまだに止まる気配を見せない――。

「十七……十八……十九……」
　ディルから一歩遅れたアリーナ。
　ゆっくりと、数を数えている。
　全方位から襲う動屍(ゾンビ)の爪を、骸骨(スケルトン)の剣を、驚くべきスピードと超人的なテクニックで、見切り、両手でいなしながら……
　橙色(オレンジ)の雌豹は、ただ、時に備え、牙を研ぎ澄ます！

　そして！
「ニフラム！」
　少女の叫びと共に、閃光が走り、大死霊使(ネクロマスター)いの周りを護る不死怪物(アンデッド)を吹き飛ばす！
「ギラっ！」

さらに、その光の玉から分かれるように、今度は炎の帯が、大死霊使(ネクロマスター)いを襲った！
「ぬうっ！」
長杖(ロングスタッフ)で、炎を受ける！
その隙を突くディル！
「てやああっ！」
ジャンプ一番、上段からの兜割り！
ガキィン！
だが、これもまた、長杖(ロングスタッフ)に阻まれ、大死霊使(ネクロマスター)いにダメージを与えることが出来ない！

そのまま空中で身体をひねり、大死霊使(ネクロマスター)いの向こう側に降り立つ！
敵の視線を、来た道の逆側に誘導する。
自分が来た道は、敵に見せない。
アリーナの存在を知られたくないからだ。

そう。
最初、ニフラムの光の玉の中に一緒にアリーナを走らせたのも。
敵が自分たちを直接視認できる距離に来た時点で、アリーナを不死怪物(アンデッド)たちの中に置き去りにしたのも。
今、大死霊使(ネクロマスター)いの視線を、アリーナに背を向けるように誘導したのも……
全ては、アリーナの存在を隠し通す、このひとつの目的のためなのだ。

「〈緑の髪の少女(グリーンヘアード)〉……」
絞り出すような声で、大死霊使(ネクロマスター)いは言う。

ディルは、応えない。
両手を、すっと、身体の横に下げる。
右手には、剣。
左手に、呪文の炎を燃やす。
意志のみなぎる瞳で、敵を睨(ね)め付ける！

剣と魔法を、同時に操る姿。
後に雷撃呪文(ライディン)をマスターした後、左手に輝くのが炎から雷へと変わり、その姿が、世界を救う勇者のトレードマークとして、世界の人々に知られるようになる。
だが、実のところ、その姿の本質は、旅の初期から変わることのない、ディルの力そのものであった。

改めて恐怖する大死霊使(ネクロマスター)い。
（信じられぬ！　この目で見てもなお……デスピサロ様と同じ、この力！）

「二十七……二十八……二十九……」
限界まで引き絞られた弓が、放たれる時が来た！
「三十っ！」
瞬間、アリーナの前に立つ亡者の群れが、弾け、吹き飛ばされる！
アリーナの拳が、目視できる領域を遙かに超えるスピードで叩き込まれたのだ！

ダッ！
友の待つ戦場へと、駆け出すアリーナ。
「不屈の女王殿下(ハイネス)」の進軍が、再び始まったのだ！

ジャッ！
ディルが不意に動いた！
大死霊使(ネクロマスター)いの横に回り込むように、左斜め前にステップしながら、顔面を狙う火球(メラ)！
「むっ！」
今度は長杖(ロングスタッフ)ではなく、左掌で呪文を受け止める大死霊使(ネクロマスター)い！
だが、その一瞬、大死霊使(ネクロマスター)いの掌が己の視界を隠すその一瞬こそが、ディルの狙いであった！
大きく左に身体を傾け、地面に左手を突く！
そのまま大きく側転、片手逆立ちの体勢となる！

掌を下ろし、再び開けた大死霊使(ネクロマスター)いの視界に映るのは、ディルの両脚のみ！
「なにっ！」

「うおおおおおっ！」
ディルはそのまま、左手を離し、頭から落ちながら、両手で剣を振り下ろした！
首を曲げ、衝撃に備える！

空中で逆立ちしたまま、いや、頭から逆さまに落ちながら、放たれた斬撃……
ディルから見て上から下、つまり、大死霊使(ネクロマスター)いから見て下から上へ。
下から襲い来る剣は、落下のスピードと側転のモーメントを加え、その軌道を刻々と変化させる！

　あまりにも予測不可能の太刀筋！
　ディルの身体能力と、アリーナに徹底的に鍛えられたバランス感覚、それらが融合して生まれた、世紀の超絶技巧（ハイパースキル）！
　敵を惑わし、討ち取る竜の剣。その名は――
「**〈竜幻斬（ドラゴンイリュージョン）〉っ！**」

「ぬうううっ！」
　だが、この恐るべき剣技に対し、大死霊使（ネクロマスター）いが驚くべき対応を見せた！
　なんと、この剣に対し、己の左腕を無防備に差し出したのだ！

　ザシュウッ！
　血がしぶく！
　ディルの剣が、差し出された大死霊使（ネクロマスター）いの腕を突き刺した！
　否！　大死霊使（ネクロマスター）いは、己の腕一本を犠牲に、幻惑の竜の牙を止めたのだ！

　ドッ！
　肩から落ちるディルの、その首に、大死霊使（ネクロマスター）いの長杖（ロングスタッフ）が押しつけられる！
　ギリッ！
「ぐうっ！」
　苦しそうな、ディルのうめき声！

「何という奇剣か……久々に肝（きも）が冷えたわ」
　額の冷や汗を拭おうともせず、大死霊使（ネクロマスター）いが言う。
「だが、腕一本で貴様の命、安い買い物だ――我の勝ちだ、〈緑の髪の少女（グリーンヘアード）〉！」
　勝ち誇る大死霊使（ネクロマスター）い。だが……
「いいえ」
　痛みと息苦しさに顔をしかめながら、ディルは言い放った！
「私たちの……勝ちよ」
　笑みを浮かべる。
「……何だと？」
　ディルの言葉の真意を測りかねる大死霊使（ネクロマスター）い。だが次の瞬間、その耳に飛び込んできたのは――

「おりゃあああっ！」
　アリーナだ！

まさに、測ったかのようなタイミング！

驚き、顔を上げる大死霊使(ネクロマスター)い。その画面を、真っ正面から、右跳び蹴りが襲う！
曲げられた左膝は、踏み切り直後ゆえか！

「伏兵かっ……！」
だが、ここでも大死霊使(ネクロマスター)いは、恐るべき速度で反応する！
右足の狙いが、顔の真ん中でなく、彼から見てわずかに左側にずれていることを直感で悟り、そのまま頭を右側に振る！
まさに、奇跡とも呼べる反射で、彼はアリーナの必殺の右足をかわした！
それ自体がアリーナの狙いであることに、気づく暇もなく……。

敵の攻撃をかわし、意識は張り詰めていても、無意識は、そして肉体はわずかに安堵する。
右の蹴りをかわし、一瞬弛緩した大死霊使(ネクロマスター)いの反射神経。
だから、彼はかわすことが出来なかったのである。右足に続き襲い来る、曲げられたアリーナの左膝の直撃を！
そう、右足をかわした先の空間の目と鼻の先には、既にアリーナの左膝があったのだ！

ゴブシャッ！
膝が顔面にめり込む！
鼻骨の折れる音！

大死霊使(ネクロマスター)いの身体が、後ろに倒れる！
伸ばした右脚を、相手の首を巻き込むように曲げ、首をロックするアリーナ！
そのまま、左膝に体重を掛ける！
倒れ込む大死霊使(ネクロマスター)い！

ゴキャアッ！

首を固定されたまま、地面に激突する大死霊使(ネクロマスター)いの後頭部！
再び顔面の骨が砕ける音と、頭蓋が割れる音、そして首の骨が折れる音が、同時に響いた。
大死霊使(ネクロマスター)いの身体が、びくんと一度、大きく痙攣し……そのまま、動かなくなった。

立ち上がる、アリーナ。
瞳を、大死霊使(ネクロマスター)いに落とす。
その顔はぐしゃぐしゃに潰れ、もはや人としての体(てい)をなしていない。

「サントハイム王家武闘術……〈夜（ナハト）〉……」
　アリーナがつぶやく、それが技の名前だった。
　正面からの蹴りを見せ技に、首を固定し、顔面に膝を添え、そのまま後頭部から相手を地面にたたきつける。
　食らえばどうなるかは、今見た通り。戦慄の殺人技である。

「永遠の夜をあげるわ」
　言い残し、そのまま、先ほどまでの敵の元を歩み去る。

「アリーナ……」
　ディルの目に映ったのは、親愛なる友の姿。

　左膝に、胸に、赤い返り血。
　悲しげな瞳。
　血に染まり、素手で相手を屠る……
　修羅の道を歩み続ける、友の姿であった。

　なぜか、ディルの瞳に浮かぶ涙。

「お疲れ様」
　瞳に涙を溜めながら、立ち上がり、手を上げるディル。
「ん」
　少しだけ微笑みを浮かべて、その手に自分の手を軽く打ち合わせる。
　ぽん、と、軽いハイタッチ。

「ん？」
　アリーナが、ディルの瞳を覗き込む。
「泣いてるの？」
「だって……だって……」
　涙が雫となり、こぼれる。
　アリーナに抱きつくディル。
「アリーナ……ごめんね……アリーナ……」

　確かに、ディル自身も、旅の途中で、幾多の敵の命を奪ってきた。その点では、ディルも

アリーナと何ら変わりはない。
　だが、こうして改めて、アリーナの修羅の宿命を見せつけられると、やはりアリーナは自分と別の地平に立っている、と、ディルには思われてならなかったのである。
　人の命を奪うことが、決して気持ちの良いものでないことは、ディル自身も実感として良く知っている。
　だからこそ、余計に……

「いつも、いつも、こんなに……」
　涙声で言うディルの頭を抱きかかえるように、後ろから、ぽん、ぽん、と二度、軽く叩く。
「いいのよ」
　修羅の姫君は、優しかった。
「いいの。これが私だし……ディルが信頼してくれてるから、応えなきゃ、ね」
「アリーナ……」

　全速力のディルと共に走り続け、不死怪物（アンデッド）にたかられたまま三十秒間耐え続け、そして最後、一撃で敵を絶命させる。
　まさに「無理難題」としか言いようのない役目を託され、そしてそれを全て実現させてしまう。それがこの王女の力なのだ。
　ディルもそれを知っていたから、この役目をアリーナに託したのである。

「でも、人使いが荒いの、もう少し何とかしてくれるとありがたいんだけどな」
　口を尖らせながら言うアリーナ。なんだかんだ言って、今回の件は根に持っているらしい。
「今度、何かで埋め合わせするわよ」
「そう来なくっちゃ！」
　泣きやんだディルに、アリーナも明るく答えた。
「じゃあ、戻ろうか……みんな待ってるわ」
「うん！」

＊

　亡者の群れが、次々と崩れてゆく。

「姉さん、敵が……」
「やってくれたんだね、ディル！　アリーナ！」

「終わった……？」

安堵に、クリフトの膝が崩れる！

「そこそこ、楽しませてもらえたのう」
立ち上がり、馬車へと歩き出すブライの背後で、氷の壁が音を立てて崩れてゆく……。

「もうだめだ〜！」
ばたんと、地面に大の字になるトルネコ！
「限界だ〜！　もう何も出りゃあせんよ！」

「お帰り、ディル！アリーナ！」
「お疲れ様」
馬車に戻ったディルとアリーナを、仲間たちが待っていた。
「へへ、軽い軽い」
「みんなも、お疲れ様でした」
陽気なアリーナ。ディルは馬車を守り抜いた仲間たちを逆にねぎらう。

ディルたちは、こうして勝利した。

確かに、苛烈な必殺技をもって大死霊使(ネクロマスター)いを倒したのは、アリーナであった。
だが、その間、馬車を守り抜いたのは、マーニャ、ミネア、ブライ、クリフト、そしてトルネコ。この五人の力。
そして、仲間たちに的確に各自のなすべき役割を割り当て（特に、最初から最後まで、アリーナのそれは、あまりに的確であった）、作戦実行時にも、自らが囮となって、切り札のアリーナの存在を敵に隠し通す……。
それは間違いなく、ディル自身の力であった。

これは、司令塔としてのディルの勝利。
そしてこれは、仲間みんなの勝利なのだ。

＊

洞窟の前。

ディルたちの前に広がる大きな入口は、馬車がそのまま通れそうなほどだ。

それだけではない。驚くべきことに、この洞窟は、階段の代わりに動く仕掛け床が上下階を結び、馬車に乗ったままで最奥部まで行けてしまうような構造になっている。
馬車で実験材料をしばしば運び込む必要があった錬金術師（エドガン）が作った設備である。

「さて、行こうかのう」
ブライが言う。
「マーニャ殿、ミネア殿……そなたらのお父上が残した遺産（エルプシャフト）を受け取りに、な」
「ええ」
「そうだね」
視線を交わし合う姉妹。
瞳が、決意に燃える。
「行きましょう！」
ディルの号令一閃！

「ハイヨー！」
クリフトの手綱捌きに従い、パトリシアはゆっくりと、洞窟の中に歩を進めていった……。

＊

この洞窟でエドガンの遺産〈魔法の鍵（ジャーベ・マギア）〉を手に入れた〈勇者〉ディル一行は、そのままキングレオ城に突入、王子カルロスを、その囚われた邪悪な力から解放することとなる。

この物語は、その戦いの序章に過ぎず――そしてディルたちはなお、いくつもの冒険を重ねることになる。
だが、それらの物語は、いずれまた別の機会に、ゆっくり語ることとしよう……。

〈完〉